

飯館村における将来世代への復興知継承に向けた教育研究プログラム

採択大学等名

東京大学

連携市町村名

飯館村

取組概要(目的)

本事業申請者は原発事故の3か月後から現在に至るまで継続的に飯館村の現場に赴き、NPO法人と協働で農家自身ができる農地除染法を開発して作物栽培を重ねてきており、「復興知」が根付くいくつかの農業現場の成長と発展を支援してきた。また、その間、事前に放射線教育をした上で、復興現場の現実を自分の目で確かめてもらい、研究やその後の人生の糧にしてもらうために学生を対象にした現場見学会を実施してきた。こうした継続的な活動を通して、放射能汚染地というハンデを背負った飯館村の復興には、単なる技術的な除染やインフラの物理的再建だけで終わらず、その先に新しい日本型(小規模世代間交流型)農業の創設にチャレンジする若者の育成が重要であると考えられるようになった。

また、飯館村の復興には、これまで培ってきた地域独自の農業の復興が欠かせない。しかし上記の通り原発事故以前と同じ人口密度状況下で村全体の農業を進めることは現状不可能である。村内における農業従事者の数が定常的に少ない社会環境と、土壌や農業利用地における放射性セシウムなどを考慮しなければならない自然環境の両状況を踏まえた農業復興への仕掛けが必要不可欠である。このように、震災後12年(帰村後6年)を経た現在の飯館村の課題に対しては、「農を中心とした生活の復興」と「将来世代への復興知継承」が必要である(図1)。

以上を踏まえながら、本事業では取組の要点(図2)を下記のように据える。

1. 農業現場に根差し、かつ最先端のICT技術を用いたスマート農業に関する教育研究を実施することで、飯館村各地に根付いた復興知を携えた国際レベルの超学問領域的研究を醸成し、飯館村における新しい日本型(小規模世代間交流型)農業の発信基盤を構築する。
2. 学生を対象とした飯館村の現地見学会や教育研究活動を展開し、農業実践者の方との交流の中で震災直後から蓄積されてきた知識(大学が有する大学知と現地の復興知)を現場の課題解決と研究活動に展開するFPBL(Field & Project Based Learning)を実践的に試みる。

これまでの成果

(1) 農を中心とした生活の復興と拡大のための研究プログラム(実地研究とラボ実験による多面的研究)(図3上6枚)

村内里山部の再生と利用再開に向けた検討を行い、飯館村における最先端のICT技術を活用したスマート農業や有機物循環に基づくリジェネラティブ農業の試み(農業残渣の再利用や地域資材を利用したたい肥作り)、ICT技術を活用した農業実践(遠隔草刈り)、農山村における電波ネットワーク構築(見守りや動物モニタリング)、およびキノコ・山菜の食文化復活に資する調査を実施した。

(2) 復興知の将来世代継承と発展のための教育プログラム(現地体験と交流会およびワークショップの実施)(図3下6枚)

全国各地の大学生を招聘し、将来世代と現地における農業実践者を含む多様なステークホルダー(農家、通いの住民、移住者、道の駅、村役場など)との交流を生むフィールドワークプログラムを実施した。また地域愛着や自己効力感といった指標を用いて飯館村との関係人口醸成度を評価することで、飯館村の関係人口と共創する地域づくりを推進した。

事業終了時点の成果及びその後の見通し

農林水産の盛んな福島浜通りの復興を考えると、細分化された科学技術の単分野によるアプローチだけでは問題の解決を図ることは難しく、また復興というテーマそのものが地域の歩みと不可分なものであるため、現場の動きや要請に合わせて感応的に知の営みを展開可能な総合科学としての農学が見出されることが重要である。本教育研究プログラムを通して、これまで多くの大学生や大学関係者が飯館村や浜通りの現地を見、それぞれの想いを持ち帰り、全国各地から被災地の復興を応援してくれるようになってきた。こういった活動は日本全体にある被災地というラベルが付いた浜通りが、社会的に復興を果たすために非常に重要なものであると考える。また、直接的に飯館村や浜通りを訪れていなくても、プログラムの参加者から正しい知識や認識による復興の現状を伝えられた家族や交友関係も含めた「復興認識/関係人口」は増加していると考えられる。浜通りの復興が今後さらに進むことに合わせて、我が国に復興知が根付き、将来的に起こる災害への備えが可能となるには、まさにこの「復興認識/関係人口」が全国に広がっている状態が必要不可欠である。事業期間を越えて、継続的に浜通りにおける将来世代が育ち、浜通り内外で活躍すること共に、浜通りの外にいる将来世代が浜通りに興味を持ち、浜通りの将来世代と交流し、協働していく社会を日本全体で作っていく必要がある。そのためにも、復興知事業の成果を継続的に活かした形で大学および地域に根付かせることを目指し、以下を実施できる環境と体制を整備する(図4)。

1) 「復興知FPBLプログラム」：大学内部において福島浜通りをフィールドとしたプロジェクトベース学習を正式なカリキュラムや学生発の活動に組み込みながら、将来世代の一端を担う学生が復興知を深く学ぶことができる環境整備を行う。

2) 「復興知STEAMフィールド」：連携大学、飯館村役場および地域の人々と協働し、飯館村における復興知が根付くフィールドそのものが教材となるSTEAM教育の在り方を模索する(例：フィールドミュージアムツアー、先進的なIoT農業の実践研究など)。

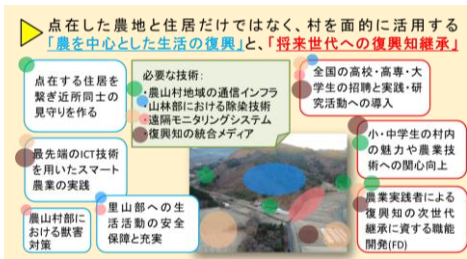


図1. 現在の飯館村の課題と村全体を活かした課題解決への道標

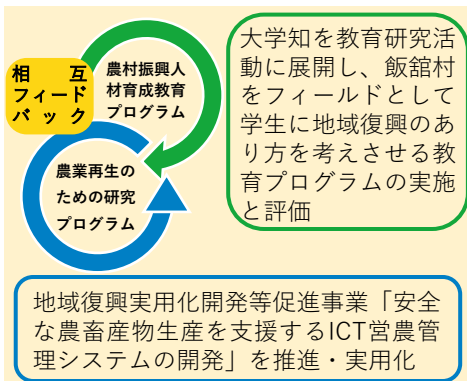


図2. 本事業において取り組む教育と研究を統合したプログラムの要点



図3. 教育プログラムの実施風景

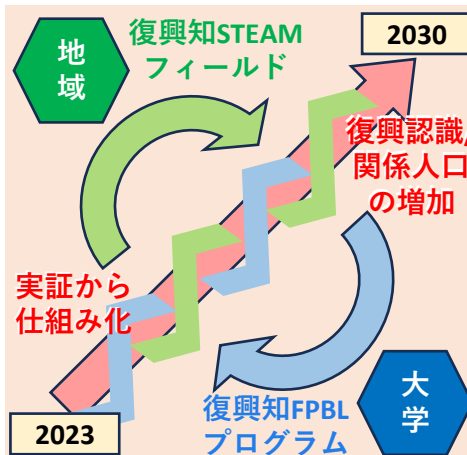


図4. 「復興認識人口」の増加を目指した事業の見通し